

教育実習生の学びのプロセスに関する一考察

－実習生と指導教員の相互関係から－

藤阪 姫羽（三重大大学）

1. 目的

本研究では、実習生が指導教員との相互関係において、どのような分岐点（悩み、つまずきなど）や通過点（気づき、納得など）を辿り、どのように学んでいるかについて明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

- 1) 対象者：実習生1名（A 大学教育学部保健体育コース在籍の3年生）と指導教員1名（B 小学校担任教員・教科指導教員）の一組
- 2) 調査方法：サトウ（2009）の複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach：TEA）を採用し、1週間ごとに2件、計8件のエピソードを抽出し実習生の内省の記述化を行った。
- 3) 分析方法：実習生の TEM（Trajectory Equifinality Model）図から実習生と指導教員の TEM 図を作成し、その説明可能性と説得性について検討を行った後、最終的な TEM 図は両者がともに一定の同意に達したものを分析対象の資料とした。

3. 結果と考察

- 1) TEM の理論を構成する基本概念を用いて検討し、第Ⅰ期を「理想の授業への適応期」、第Ⅱ期「理想の授業からの離脱期」、第Ⅲ期を「理想の授業の模索期」、第Ⅳ期を「理想の授業の挑戦期」、第Ⅴ期を「理想の授業への葛藤期」と時期区分した。例えば第Ⅲ期は、他教科実習生に重ねて文学の授業を行っているイメージがわからないという径路を辿り、背景には指導教員と他教科実習生の授業に、妙に差を感じるという「分岐点（Bifurcation Point：BFP）」と、他教科実習生の授業と指導教員の授業を受ける子どもの姿に、妙に差を感じるという「社会的助勢」が影響していた。
- 2) 実習生の学びのプロセスを、生田（1987）の「わざ」の習得プロセス（「形」の模倣、「型」の理解、「型」の成就、「型」の習得）を援用し、考察した。

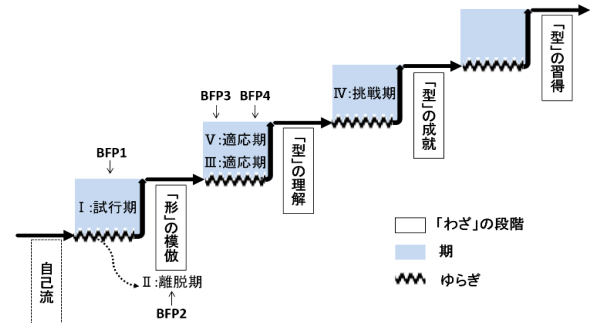


図1 実習生の学びの発達プロセス

実習生の学びについて、第Ⅰ期は「形」の模倣への潜入、第Ⅱ期は「わざ」の習得プロセスから外れていることから「形」無し、第Ⅲ期は「形」の模倣と「型」の理解のあいだ、第Ⅳ期は「型」の理解と「型」の成就のあいだ、第Ⅴ期は「形」の模倣と「型」の理解のあいだに位置づけた。

- 3) 以上のことから、図1の通り「実習生の学びの発達プロセス」をモデル化した。各期は、「わざ」の段階上にあるのではなく、2つの「わざ」の段階のあいだを「行きつ戻りつ」しながら、「ゆらぎ」として位置づいていたこと、また、4つの BFP によって「ゆらぎ」が生じ、実習生の学びは必ずしも「わざ」の段階を順番に進むわけではないことが明らかとなった。

4. 結論

本研究では、次の3点が明らかとなった。1点目は「わざ」の習得プロセスにおいて「行きつ戻りつ」であり、2点目は「行きつ戻りつ」の転機は「わざ」の習得プロセスの各段階のあいだに「ゆらぎ」として出現し、3点目は実習生が「わざ」の習得プロセスの2段階と3段階のあいだで止まっており、「未到達」であることが明らかとなった。

5. 主な参考文献

- 1) 生田久美子（1987）「わざ」から知る、東京大学出版会。